

新国立 無責任体制

有識者会議 ずさん計画後押し

コストや工期をめぐる課題に不透明感を残したまま、新国立競技場の計画は有識者会議で承認された。事業主体の日本スポーツ振興センター（JSC）も問題点への説明を尽くしたとは言いがたい。五輪メダリストは、このまま計画が進むことに複雑な表情を見せた。

JSC 詳細説明なし

有識者会議は、出席した委員十二人から二千五百二十億円の膨らんだ総工費の詳細や責任を問う声もな

く、計画を了承した。続く日本スポーツ振興センター（JSC）の記者会見も、具体的な説明がないまま四

十分で終了。なぜ、千三百億円の提示額で募集したデザインが倍近くの額に膨らんでも固執し続けるのか。疑問は残ったままだ。

「このデザインの表紙が国際オリンピック委員会（IOC）の多くの委員の賛同を得られた」「安倍総理が招致の最終プレゼンテーションで、このデザインで建設すると言ったことは重い」

有識者会議で、東京五輪・パラリンピック大会組織委員会の森喜朗会長や日本オリンピック委員会の竹田恒和会長らの委員から、JSCを後押しするように発言が相次いだ。

国から約五百億円の費用負担を求められている東京都の舛添要一知事は委員の一人として出席したが、「文部科学省とJSCの責任で、きっちり完成させていただくことを重ねてお願いします」などと述べるにとどめた。

河野一郎理事長ら三人が並んだ会見でJSC側は、河野理事長は、計画見直しを求める建築家グループなどから提案があったことを認めた上で、「ただ、われわれのミッションはあのデザインを前提として工事を進めること」と話した。



有識者会議の前に話をする（左から）森喜朗氏、竹田恒和氏、舛添要一都知事。7日午後、東京都港区で

安藤忠雄氏は姿見せず



安藤忠雄氏

新国立競技場のデザインを決める国際コンペで審査委員長を務めた建築家の安藤忠雄氏は、七日の有識者会議を欠席した。会議のメンバー十四人中、唯一の建築家で計画の中心的立場の一人だが、二〇一二年十一月のデザイン決定後、公の場ではほとんど発言せず、取材にも応じていない。

この日の欠席理由を、JSCは「本人の都合」と説明。安藤氏の事務所は「個人のことなので答えられない」と話した。

取材にも応じず 語らぬまま

本紙はこれまでに三回、取材を申し込んだが「対応はJSCが一括して行う」「個別の取材には答えられない」などと応じなかった。基本設計案を承認した昨年五月の有識者会議では「いろいろな意見を受け止め、しっかりと発言していく必要がある」と述べていた。

有識者会議機能せず

スポーツ評論家の玉木正之さんの話 2520億円の財源や2本の巨大なアーチが本当に建設できるかなど分からないことだらけ。にもかかわらず、有識者会議では質問が出ずにすんなりと実施設計が了承された。有識者会議として全く機能していない。国際オリンピック委員会（IOC）が五輪改革にコスト削減を盛り込む中、このような巨額な施設を建てる必要があるのか。建設後の収支計画もいがかげんで、多額の税負担が将来必要になるのは明らかだ。あきれてものが言えない。

国民は納得できない

千葉大の新藤宗幸名誉教授（行政学）の話 当初は1300億円とされていた整備費が2520億円にまで膨らむなんてあり得ない。非常にずさんで無責任な計画だ。財源も不透明で、国民は納得できないだろう。さらに金額が増える可能性もあり、国の財政が厳しい中、膨大な費用を掛ける意味がどこにあるのか。五輪は国民的イベントと言いつつ、国民の理解を得られない施設を造るのはおかしい。今からでも遅くない。著名な建築家たちの指摘にきちんと耳を傾け、計画を見直すべきだ。

新国立競技場のデザインや大量の資材が必要になると、技術的な困難さなどを挙げながら、基本設計時より費用が膨らんだ要因を「特殊性」と説明した。「特殊性はなぜ事前に分からなかったのか。見積もりが甘かったのではないのか」との質問にあいまいな返答をするJSC幹部に、記者が「質問に答えていない」と批判する場面も。